

特集

# 往來 日中ことばの

名誉教授 荒川清秀



日本語と中国語には共通の漢語がたくさんある。このうち、近代の事物、思想等を表す共通の漢語は、幕末以来のことばの交流によって生じたものである。江戸時代、日本では長崎と江戸を中心にオランダ学が起り、多くの書物が日本語に訳され、その中でおびただしい語がつくられた。長崎は出島を通じてオランダ、中国と交易していたが、その担い手であるオランダ通詞たちは単なる通訳ではなく、多くの近代用語を日本語に訳した。たとえば、「引力、重力、弾力、遠心力、圧力」等である。一方、江戸ではオランダ人と接する機会が少なかった環境下で、『解体新書』を初めとする医学書、薬学書、物理学書、化学書、兵学書が訳された。幕府は途中から蘭学者たちを「天文方」（翻訳所）に組織し、『厚生新編』『海上砲術全書』等の大規模なオランダ書を翻訳させた。医学用語では、「神経、十二指腸、網膜、鼓膜」などが生まれた。江戸蘭語学の中心人物である宇田川榕庵などは、『遠西医学方名物考補遺』（1834）の中で、「酸素、水素、窒素」などを考案している。一方、上方の緒方洪庵などは『扶氏経験遺訓』の中で、「健康、経験、実験、検査」などの漢語を使用している。なお、このうちの「経験」はもともと中国の医学書「経験方」（「方」は処方箋）を踏まえ、「クスリを経験スル（使って試してみる）」から生まれたものである。

オランダ学の翻訳の特徴は、その多くが語の構成成分をそのまま直訳していることである。たとえば、「十二指腸」などは「十二の指の腸」を合わせ

たものであるし、江戸地理学で生まれた「半島」などは、オランダ語の、halfeiland（半分の+島）を合わせたものである。

つまり、日本が明治維新を迎える前に、多くの近代用語が準備されていたというわけである。さらに、明治維新になると、オランダに留学した西周などが、「希哲学」から「哲学」を考案し、西や福沢諭吉らを中心とする明治の啓蒙学者らが、明六社を中心に「義務、権利」といった社会科学用語を考案、使用した。

日本の近代用語は明治の30年頃に完成するが、それはちょうど日清戦争（1894）が終わった頃で、この戦争に負けた清朝が派遣した留学生や、政変の中で亡命した梁啓超らの知識人は、こうした日本でできた近代用語をほぼそのまま中国語の中へ持ち込んだ。これが近代用語が共通になる一つの要因である。

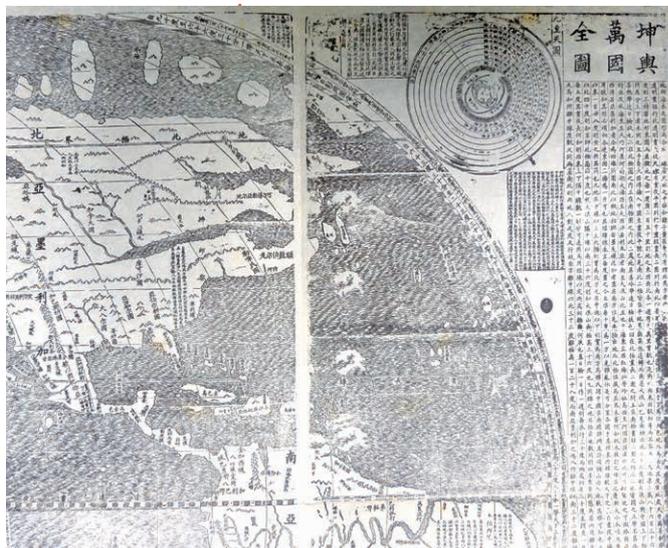
ところが、ここ30年来の日中欧の近代語研究でわかってきたことは、こうした明治での交流が始まる前に、西洋人による翻訳と日本への移入があったことである。考えてみれば、日本の開国は1854年、中国がアヘン戦争によってその戸をこじ開けら

れたのは南京条約（1842）からであった。いや、それ以前でも西洋人たちは、中国への進出をねらい、宗教書だけでなく、近代科学の書を中国へ翻訳紹介した。16世紀に中国にやってきたカトリック、イエズス会のマッテオ・リッチなどは、皇帝や官僚の歓心を引くために、「自鳴鐘（置き時計）」や世界地図を持ち込んだ。その中で、「地球、半球、赤道、地平線、地中海、熱帯、温带、寒帯」などの地理学用語を紹介した。これらを収めた書や地図は、鎖国下の日本へも密かに運び込まれ、多くの蘭学者たちがその中の用語を使用した。

西洋の波は鎖国下の日本へもやってきた。キリスト教の伝来以来、長崎のコレジオでは天文学書が翻訳された。「回歸線」「暑帯（＝熱帯）」などはそこで生まれたもので、「回歸線」などは、日清戦争後中国語の中へ入って行った。中国の学者は「熱帯」を日本製の漢語であると判断したが、筆者は日本人なら「あつい地帯」から生まれるのは「暑帯」であって「熱帯」ではないであろうと仮説をたてたものである。

「回歸」は「メグリカエル」という『ラポ日辞書』の解釈から生まれた和製漢語であるが、現在の中国では、現代中国語の「かえる（＝回）」と古典語の「かえる（＝帰）」が合わさったものと理解されている。このように漢語には、両言語の違いが謎のように塗り込められている。

（以上荒川清秀著『漢語の謎』（筑摩書房、2020年）の紹介に替えて）



坤輿万国全圖